

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）  
県政の課題（テーマ）報告書

令和 7 年 6 月 11 日

山梨県知事 殿

氏 名 丸山美菜子

留 学 先 シドニー工科大学

留学期間 令和 6 年 7 月 25 日～

令和 7 年 5 月 21 日

1 県政の課題（テーマ）

[山梨県総合計画、第3章アクションプラン、戦略4-躍動する「やまなし」へ進む道、政策3、共生社会化の推進]

5:年齢・障害の有無・性的志向・ジェンダー・アイデンティティ等の多様性尊重

6:多文化共生社会づくりに向けた支援と環境整備

8:共生社会で活躍する人材の育成

2 概要

県政の課題（テーマ）を解決に導く考え方及び対応策等

私は将来、日本の高等学校で英語科教員となり、生徒の英語力向上とともに、共生社会の担い手となる人材を育成したいと考えている。シドニー工科大学での10か月間の留学を通して、私は「多様性の尊重」「多文化共生」「共生社会で活躍する人材の育成」という山梨県の県政課題について、より実践的・具体的な視点から向き合うことができた。以下、その経験を踏まえて、私が今後教育を通じてどのように山梨県に貢献できるのかについて述べたい。

第一に、「多様性の尊重」に関する課題である。山梨県総合計画においては、年齢、障害、性的指向、ジェンダー・アイデンティティなどに関する多様性の理解が十分でないことが課題として挙げられている。私が留学したオーストラリアは、多文化共生が根付いた国であり、LGBTQ+に対する配慮や理解も社会全体に広く浸透していると感じた。私が留学したオーストラリアは、多文化共生が根付いた国であり、LGBTQ+に対する理解や配慮が社会全体に広がっていると感じた。特に私が滞在したシドニーでは、毎年「シドニー・ゲイ・アンド・レズビアン・マルディグラ」と呼ばれる LGBTQ+ の大規模なパレードと文化イベントが開催されており、市民の多くが参加・応援するなど、多様な性のあり方が広く受け入れられていることを実感した。こうした経験を踏まえ、私は将来、英語の授業内で多様な価値観に触れる教材や話題を積極的に取り入れ、生徒が互いの違いを理解し、尊重し合えるような学習環境をつくりていきたい。多様性への無関心は、知らず知らずのうちに差別や偏見の土壌を生むことがある。だから

こそ、教育がその意識を変えていく出発点になると私は強く感じている。

第二に、「多文化共生社会の実現」に向けた支援についてである。山梨県でも外国人住民が増加する中、日本語が不自由な児童生徒が孤立しやすい状況にある。私がシドニーで体験したもう一つの重要な活動は、日本語を第二言語とする大学生たちへの日本語授業のサポートである。そこでは、母語以外の言語を学ぶことの難しさだけでなく、異文化の中で学び生活するストレスや不安についても直接学生から聞くことができた。また、私自身も生活者として言語的な壁や文化の違いに直面し、日本語が話せないことで感じる不安や孤独を当事者目線で理解できた。こうした経験を活かし、将来は外国にルーツを持つ生徒にも安心して学べる環境づくりを進めたい。例えば、授業中に使う英語の語彙を視覚化したり、日本語の補助教材を作成したりといった配慮を日常的に行い、すべての生徒が「自分もクラスの一員である」と感じられるような学級運営を目指していきたい。

第三に、「共生社会で活躍する人材の育成」についてである。グローバル化が進む今、異文化理解や協働する力を持った人材育成が求められている。シドニー工科大学では、現地で働く人々へのインタビューを通して、移民社会の中でどのように異文化が共存し、対話を通じて価値を生み出しているかを学ぶ授業に参加した。私たちは多様な背景を持つ人々と英語でやり取りをし、共通点や違いから新たな視点を得ることができた。このような経験を日本の教育現場に還元するには、生徒が英語を「テストのため」ではなく、「誰かとつながるための道具」として実感できるような授業が必要である。私は将来の授業において、国際問題やSDGsなどのトピックを扱い、英語を使って意見を述べたり議論したりする活動を積極的に取り入れたい。こうした取り組みを通じて、生徒が自分の考えを英語で発信できる力をつける、共生社会の一員としての自覚を持つことを目指していく。

以上のように、留学を通して得た知見や体験は、教育現場で多様性や多文化共生を推進するための確かな基盤となった。シドニー滞在中には、実に多様なバックグラウンドを持つ人々と直接関わる機会を得た。異なる価値観や文化に触れる中で、共通点を見出し、対話を重ねることの大切さを強く実感した。山梨県が掲げる三つの課題はいずれも、こうした「出会い」や「対話」を重視する教育の力によって解決に向かう可能性を持っている。私は、英語という教科を通して、生徒一人ひとりが自分と異なる他者と関わり、協働し、共に生きていく力を育んでいく教育を実践していきたい。そして、教育という形で山梨県の未来を支える一助となることを目指して、今後も学びと実践を重ねていく所存である。(1796字)

